

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第14号(平成26年11月15日)

読者数：488名(募集中)

メールアドレス：hirosima.idea.c@urban.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

まちづくりに思うこと

元広島市立大学学長
藤本黎時



まず私自身の体験から申し上げたい。1932年生まれの私は、戦中戦後を呉市で過ごした。太平洋戦争末期の呉市には、40万人を超える人口がすり鉢の底のような地形の狭い地域に窮屈に住んでいた。現在は、市町村合併で蒲刈、御手洗まで合併して面積は倍増したが、一方人口は激減し、24万人を切る状況である。20年前、職場の関係で広島市に居を移すことになり転出届けのために呉市役所に出掛けた時、市民課の窓口で呉市から転出する理由書を書かされた。

私の情報源は専ら新聞記事とテレビのニュースに限られているが、最近では、日本が急速な少子化によって本格的な人口減少社会に陥ることへの危機感を訴える記事が多い。日本世論調査会の調査結果によれば、少子高齢化が急速に進み、市区町村の人口が減り、将来の自治体運営が困難になるという不安を抱いている人が84%に達するという。2040年までに地方自治体のほぼ半数が消滅の危機に晒されると予測されている。また、野村総合研究所の試算によれば、10年後の2023年には定住者がいない住宅が1400万戸に達し、5軒に1軒が空き家になるとのことである。(注)

毎日のニュースを読み、また聴きながら、長年平和を享受してきたわが国の将来について、これから10年先、30年先の社会はどのようになっているだろう、と考えると暗い気持ちになる。数年先を目途にではなく、20年、30年先を目途にまちづくりを目指さなければならない。

最近、安倍内閣は「魅力あふれる地方創生」を最重要課題として、その政策を実行するために地方創生担当相まで任命した。地方創生法案に異論を唱えるつもりはないが、少子高齢化による人口減に加えて、大都市への若い世代の人口流出が進み、地方自治体が消滅の危機に瀕している現状を見ると、地方の農村部への企業誘致や市町村合併による財政基盤強化などの施策や対策が本当に効果をもたらすのか、と首を傾げたくなる。

次に、わが広島市のまちづくりの問題を考えたい。昨年解散した広島市土地開発公社は、工業団地の開発・整備のために大規模な造成工事を行った。特に安佐南地域のセントラル・シティーところや伴南地区には、住宅団地の整備は進んでいるが企業の誘致はまだ進んでいないように見える。

安佐南地域は山陽道と中国道が交差する交通の要であるところから、物流活動の拠点となっている。国内の大手企業は、高速道が整備されたお蔭で、本社を東京や大阪など大都市圏に置きながら当地方には倉庫だけを残しているような印象である。また、最近の企業の傾向として、大企業は工場の新設・移転先として、安価な労働力が得られる海外の新興国を目指している。これでは地方からの人口流出を止めることができず、地方の活性化は望むべくもない。

企業誘致もまちづくりの有力な施策であることは否定しないが、もっと効果的で即効性のある方法は、観光資源の開発ではなかろうか。先ず、これまでの最大の集客力ある企画としては、毎年5月に開催されるフラワーフェスティバルを挙げることができる。次に、新カープ球場も観光資源となっている。

十数年前、充て職で広島観光コンベンションビューローの委員をしていた頃、当地で開催された国際会議や学術的な国際学会などによるその年度の経済効果が280億円と報告されたことを覚

えている。大規模な国際会議や各種国際学会の誘致や、大きなイベントを開催することによって、市内のホテル、商店、歴史的・文化的施設などの活性化につながり、経済効果が期待できるだろう。

先ごろ、「国際観光産業振興議員連盟」会長の細田博之氏は、「外国人にお金を落としてもらう国家に変質するのだ」と豪語して、カジノ中心の統合型リゾート施設（IR）整備推進法案を提案しようとしている。たとえカジノが有効な観光資源だとしても、パチンコ店に加えてさらにカジノ関係の施設を設置することには断固反対である。ギャンブル依存の人間を増やし、社会を腐敗させる元凶となるだろう。

最後に、20年、30年先の活性化した広島のまちづくりの実現のためには、若者の大都市圏への流出を止めるだけでなく、日本中津々浦々から若者たちが集まるまちづくりを目指すことではなからうか。

大学進学率について中国5県を見ると、地域によって大学進学率に大きな差があることがわかる。特に大学や専門学校が少ない山陰側の地域では、進学を希望しながら高卒で社会に出る優秀な若者も多いと聞く。また、関西や関東の大都市圏の大学が広島地域で学生募集を実施し、受験生人口の約50%が大都市圏の大学に流出している現実もある。広島地方は中国5県の中で大学数が一番多い地域である。大学、県市の行政、市民が協力し合って、若者たちが当地域でぜひ学生生活を送りたいと希望するような魅力あるまちづくりをし、企業は卒業後の受け皿としての多種多様な仕事を用意するなど、若者の大都市圏への流出を防ぐとともに、向学心に燃える若者を他府県から呼び寄せる工夫をすべきである。

以上、少子高齢化が進むわが国の現状について憂慮しながら、思いついた広島市のまちづくりについての偶感である。

（注）参照：「中国新聞」2014年10月4日版 p.8、12日版 p.1

ひろしまのまちづくりの動き

○サッカー場建設3候補地に絞る！

官民共同の検討協議会によりサッカースタジアムをどこに建設すべきか検討がなされ、優劣を比較して①広島みなと公園②旧市民球場跡地③中央公園自由・芝生広場の順位が示された。

11月に最終の協議会を開き、報告書をまとめる予定。

コメント

検討協議会に建設地を決定する権限はもともと与えられていない。サッカースタジアムを中心に据えて候補地を選定し絞り込んでいるが、まちに求められるものはサッカースタジアムだけではない。必要と思われる他の用途と合わせて、将来のまちづくり全体のバランスを考えた総合的判断がなされるべきである。また候補地となった敷地サイドからのあるべき姿が全く無視されている。まちづくりの専門家によるもっと踏み込んだ検討をすべきである。

（編集委員 瀧口信二）

候補地3カ所の評価	用地条件	環境条件	アクセス	けん引性	付加機能	周辺機能	波及効果	コスト性	迅速性	予来場者	整備費
中央公園自由・芝生広場(7.9%)	○	○	○	○	△	○	△	○	○	1万7400人	約146億円
旧市民球場跡地(3.9%)	△	○	○	○	△	○	○	△	△	1万7400人	約194億円
広島みなと公園(8.4%)	○	○	○	○	○	△	○	○	○	1万5600人	約143億円

【注】スタジアムは日本代表の公式戦が可能で、日本サッカー協会の「スタジアム標準」にあるクラス1(2万~4万人収容)の3万人規模を想定

中国新聞（10月25日付）より

○旧市民球場跡地に『ひろしましみんなひろば』を提案

世界遺産ひろしま原爆ドームを擁する広島平和記念公園から基町高層住宅・広島城に至る一帯は、隣接する本川と合わせて約200mの広がりがあり世界に誇る都心のコア空間である。

被爆当時、草木も生えないと言われ、70年目を迎える現在にあって日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会（委員長 前岡智之）が、被爆100年を目標としたこの地区のあるべき姿「ひろしましみんなひろば」を提案している。

その中間報告が去る9月23~28日に岡山市で開催された



ひろしま住宅・建築フェスティバル展示ブース

J I A公益社団法人日本建築家協会の全国大会と10月12～13日広島市で開催されたひろしま住宅・建築フェスティバル2014において提案・展示された。

ここでは、この地域の抱える7つの問題点を抽出し、それらを解決するための提案を行うとともにランドデザインとしてまとめている。

提案①『バスセンターの整備』

②『回遊性の向上』

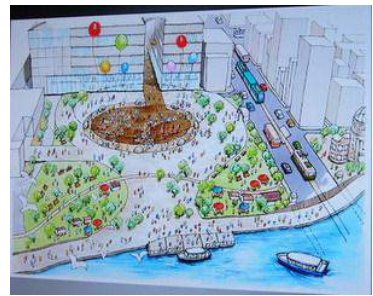
③『河岸民有地を公園に』

④『新しい都市施設』

⑤『河川街の整備』

⑥『基町高層住宅の再整備』

⑦『リバーウォークの拡充』



ひろしましみんなひろば
イメージ図（ビデオより）



展示模型

中でも再整備の決定が急がれる広島市民球場跡地のあるべき姿としては、誰もがいつでも自由に利用できる、当り前の市民生活が継続する中で、そこで培われるホスピタリティの醸成により、国際平和を希求するという視点から「ひろしましみんなひろば」に至ったとしている。

本誌では、今後の展開に注目し、追跡していくこととしたい。

（編集委員 前岡智之）

○広島復興の軌跡（第9回）・・・被爆建物「本川小学校」について

本川小学校は爆心地に一番近い小学校である。太田川（本川）を挟んで平和公園の対岸にあり、東方向に原爆ドームを望むことができる。『はだしのゲン』に登場する学校としても知られ、原爆ドームの佇まいと朝夕の平和の鐘の音は生徒の平和への心呼びさませてくれるという。

1. 戦前の姿

学校の少し南側に位置する天満橋から本川橋への通りは昔の山陽道（西国街道）で、このエリアは江戸時代から商業地域として栄えており、学校の創立も明治6年と早い。昭和3年には市内の小学校として最初の鉄筋コンクリート校舎が落成。レストハウスや旧広島市役所を手掛けた建築家増田清の設計による、地上3階地下1階、L字型の平面を持つ端正な建築で、対岸に建つ産業奨励館とともにハイカラな佇まいであった。



戦前の姿

arch-hiroshimaのHPより

2. 被爆時の状況

昭和20年8月6日の原爆は当校の東360m、高度約600mの上空でさく裂し、運動場で遊んでいた子供たちは一瞬にして命を奪われる。爆風は校舎の窓枠を吹き飛ばし、壁をくの字に曲げ、強烈な熱線により自然発火した炎が窓という窓から一斉に吹き上げ、校舎内の全てを焼き尽くして自然鎮火。逃げ遅れた子供たちの亡骸が教室内で多数発見される。

学童疎開をしなかった1・2年生の400人余の児童と10人余の教職員が亡くなった。生存者は教員1名、児童1名のみ。

翌7日、ここは臨時病院・救護所となり、校庭では多くの死者が焼かれていた。



昭和20年被爆後の姿

3. 戦後の歩み

その後、校舎は最低限の補修を施され、翌21年2月には吹きさらしの教室で授業が再開された。教員4名、児童45名。

昭和24年、平和記念都市建設法が制定され、翌年に文部省より平和都市記念学校の指定を受ける。



昭和21年授業風景

昭和26年にはL字型被爆校舎の南部分を解体して、西校舎と講堂が整備される。講堂は第6回国民体育大会のレスリング会場となり、天皇皇后両陛下が行幸される。

昭和29年に管理校舎、32年に南校舎が完成して現在の飛行機型の校舎配置が整う。

昭和62年に被爆（東）校舎が解体され、63年4月に新東校舎と被爆校舎の一部を保存活用した平和資料館が完成する。

4. 平和資料館

平和資料館は鉄筋コンクリート造地上1階地下1階。3階建てだった被爆校舎の一部の地階と外壁を残し、内部を改装して昭和63年5月に開館した。

設計を担当した前岡智之氏は「被爆校舎の保存には新耐震基準に基づく耐震上の問題があった。2階床スラブも含めて上階を撤去し、積載荷重をゼロにすることによりクリアした。被爆建物は一度壊すと復元は不可能であり、惨禍を伝える貴重な生き証人として多くの子供達の心に届いて欲しい。」と語る。

下駄箱が置かれていた地下室を中心に当時の焼け跡が残るなど、原爆の被害状態をそのまま残し、被爆の証として保存されている。

主な展示品は被爆状況の写真パネル、校内で見つかった溶けたガラス瓶、産業奨励館から元安川に崩れ落ちた御影石、かつて原爆資料館に置かれていた被爆直後の市街地パノラマ模型、慰霊碑の碑文「安らかに眠ってください・・・」の額、その他。

平成10年9月には入館者数10万人を超える。ただ外部から直接出入りできず、見学には小学校側に事前申し込みが必要なため不自由さを感じる。袋町小学校並みに公開性を高めれば、もっと入館者は増えるであろう。

*（主な参考文献）本川小学校のHP及び平和資料館のHP他

（編集委員 瀧口信二）



昭和25年頃



平成26年8月平和資料館

□ほっとコーナー

『父のこと』

神岡千春（鹿島建設(株)中国支店）

私の父は今年で86歳、一人暮らし歴20年である。幸いなことに大きな病気に縁がなく、週一のゴルフ、趣味の写真撮影にほぼ毎日車で出かけて行く。シロイルカを撮りにアクアス日帰りなんて珍しくない。私の母は25年前に癌を患い突然死んでしまった。実際は随分前から悪かったらしいのだが、一人娘が結婚するまではとがまんしていたらしい。それから始まった、日本の高度成長を支えた世代一まじめ人間の父と甘やかされて育った過保護娘の共同生活。口数も少なく仕事ばかりの父とはなんだかよそよそしくて、なんで父さんなんかと一途方に暮れたものだったが、多分父も同じ気持ちだったと思う。

父が住んでいるマンションは私が設計した建物で、第一号の入居者になってくれた。今では毎週日曜の夜、父の家で主人と3人食卓を囲みいろいろな話をする。仕事やその人間関係で悩む私に、自分の経験を添えながら的確な助言をくれたり励ましてくれたりもする。車のエンジンの設計技術者だった父は、後輩達の挑戦を自分の事の様に嬉しそうに話す。ただの仕事人間のように見えていたが、自分の好きな事を思いをかけて純粹に打ち込んできたのだなど、父の生き方を誇りに思えるようになってきた。楽しそうに新型デミオに乗り換える準備をしているのは、少し心配ではあるけれど。

毎日仏壇の花を絶やさないと父だが、自ら母の事を話題にする事はない。母を病気で死なせてしまった事を今もまだ受け入れる事ができないのかな。あと7年、33回忌には長岡のお寺にいるお母さんに会いに行きましょう。これからも元気でいてください、お父さん。



マッサンの生家竹鶴酒造前
父とのツーショット

○ 「時代を語り建築を語る会 (第6回)」報告 語り人：高橋 衛氏
 ～広島に博物館は必要なのか？ 博物館構想を検証する～

高橋 衛氏は昭和50年代、広島市・荒木市長時代の文化政策において、とりわけ博物館構想策定の中心的な役割を果たされた。当時、構想された背景・全体像・課題などエピソードも交えて語られた報告です。

主 催：時代を語り建築を語る実行委員会（代表：石丸紀興）
 日 時：2014年9月26日 場所：まちづくり市民交流プラザ

略歴：1929年生まれ、
 広島大学経済学部教授、
 福山大学教授など歴任。
 広島大学名誉教授、大和
 ミュージアム運営協議
 会会長

☆ 構想の背景

- ・当時、文化政策の論議の中で「比治山を芸術の森として東京・上野の森のように考えたい」との強い思いがあった。
- ・比治山芸術公園が、政令指定都市発足（1980年）の記念事業として計画され、博物館はその中心的施設として位置づけられた。

☆ 構想の主な論議

- ・点在する博物館（広島城・美術館・こども文化科学館など）を群として有機的に連続させる新たな「博物館群構想」により、広島市博物館（仮称）は博物館群のセンター機能を有する施設とする。
- ・近代～現代のテーマを中心とした博物館とすることを基本に、広島の特徴を打ち出した目玉展示が重要課題であった。
 ①教育（高等師範学校が置かれた教育県）②スポーツ（日本人初の金メダリスト織田幹雄、似島のドイツ人捕虜が普及させたサッカー）③海外移民（ハワイ・ブラジルなどへ全国一の移民県）④産業（自動車、江戸時代からの針製造）⑤戦前の盛り場と娯楽、戦後の復興過程などが提案され論議された。
- ・博物館の計画にあたって時世・風潮に不偏であり、イデオロギーを絶対に持ち込まない。

☆ 博物館の必要性など

- ・原爆投下前の広島は軍都でもあり、豊かな文化的都市でもあった。私達はその広島の歴史と文化を後世に伝える使命がある。
- ・博物館は都市の文化レベルを象徴する。その数は先進国の都市と比較して極めて少ない。
- ・放影研（元 ABCC）移転問題の解決が、博物館構想実現のための第一歩でもある。



<コメント>

文化とは「心のゆとり」であって「実利的な目的から離れた創造的な営み」である。30余年前に文化都市を目指して構想され、広島市民の文化の中心となる比治山芸術公園は未完である。その中核となる博物館構想は忘れ去られようとしている。もしも、この博物館構想が実現していれば、江戸東京博物館（1993年開館）のような存在感が今の広島にあると確信する。

（編集委員 高東博視）



比治山芸術公園の模型

- | | |
|----------|---------|
| ① 青空図書館 | ④ 博物館 |
| ② 彫刻の森 | ⑤ 現代美術館 |
| ③ 創造センター | ⑥ 伝統工芸館 |
- 他に野外ステージ、平和の森など。
 （注）創造センター予定地に現代美術館が立地している。博物館予定地には現在も放影研（元 ABCC）が立地し移転の目途なし。

「比治山芸術公園基本計画報告書」
 広島市 1980年（昭和55年）10月

○人物登場：松波龍一氏（松波計画研究所代表）

インタビューの前に、別荘を持つバリ島の話で盛り上がる。年に何回か気が向いたときに訪れて、バリ島での生活を楽しみ、英気を養ってくる。ゆったりした時間の流れと異文化に浸る心地よさがたまらないそうだ。

☆ これまでの足跡

生まれ育ちは松山で大学から東京へ。東大闘争の最中で、大学の産学官協働に異が唱えられ、当時都市工学科助手だった土田旭氏が大学を辞めて1970年に都市環境研究所を設立。まだ都市計画系のコンサルが少なかったので、行政や住都公団等からの仕事が集中。

広島市の都心基本計画を皮切りに筑波研究学園都市のマスタープラン作り、広大移転の賀茂学園都市計画等。学生アルバイトとして手伝ううちに正規社員となる。

広島県から市街地整備基本計画の受託を機に、広島に出先を置くこととなる。地域主義を唱えていたこともあり、東京に見切りをつけて81年に広島に移り住む。89年からは湯来町へ、現在に至る。

☆ まちづくりの仕掛け人

都市環境研究所の広島事務所長として広島との関わりを深めていくが、代替わりも必要だし、そろそろ自分のペースで自分の好きなことをやりたいという思いが強くなり、94年に個人的な事務所、松波計画研究所を設立。

広島市を中心に中四国地方における都市開発の推進、都市基本計画の立案に携わる一方で、中山間地域での地域づくり活動にも精を出す。オープンカフェや雁木組、ポップラ・ペアレンツ・クラブ等、広島のみまちづくり関連の団体の仕掛け人である。

特に、平和大通りにオープンカフェを作ろうという活動は印象深い。平岡市長時代、平和大通りの再整備計画に携わり、魅力的なオープンスペースにするためにオープンカフェができないか議論した。その後、関係者が集まって研究会を開き検討したが、道路上に作るのは法制度的に難しいという結論に達し、まずは機運を盛り上げるための運動を起こそうという主旨で95年にカフェテラス倶楽部を設立。翌年には青年会議所主催の広島文化デザイン会議の一環として平和大通りに「オープンカフェ・ナイト」を出店し、98年まで3回続く。更に98年には市の直営で本格的なカフェレストランをオープンさせ、市民の評判となる。99年から3年間は民間事業者に委託したが、赤字のため打ち切りとなる。

その後、舞台は河川に移り、京橋川沿いでのオープンカフェに結実した。そのきっかけとなったJALシティとフレックスホテルでの先行的な取り組みについては、思い出が尽きない。

なお平和大通りのカフェテラス倶楽部は、現在も継続中である。

☆ 湯来里守機構とは

湯来町に来て25年が経ち、集落の組織「同行」の仲間入りもした。周囲は空き家や遊休農地が増えていくなかで、美しい湯来の里を守るためにNPOの湯来里守機構を昨年立ち上げた。空き家を放って置くのはもったいない。維持管理の世話と活用のお手伝いをし、対価をいただく仕組みで、現在2件成約している。そのうち1件は内部を改修して食堂を開業できるところまで来たが、まだ入居者が見つからない。これから営業に力を入れて10件ぐらい手がかけられれば、NPO活動も軌道に乗るであろう。その点、米国人のアレックス・カー氏は古民家を改修して古民家ステイの運営を日本各地で成功させている。地元の建築家やスタッフ等を上手に束ねるマネジメント力は見習わなければいけない。

☆ まちづくりライブラリーを是非

広島市の都市環境研究所をたたむ時に貴重な資料が残り、手元に保管しているが、どこかで共有できる場が欲しい。広島のみまちづくりの歴史が分かるライブラリーがあれば、誰でも学べるし、そこから都市政策のシンクタンクにつながるかも知れない。

コメント 柔軟な思考の持ち主だ。日本焚火学会のような遊び心の集まりを主宰し、何事も楽しみながらをモットーに活動している。まだまだ天下のご意見番としてご活躍を！

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）



略歴：1947年愛媛県生まれ、1973年東大都市工学科卒、都市環境研究所入所、1982年同社広島事務所長、1987年同社代表取締役、1994年松波計画研究所設立、2013年NPO湯来里守機構設立

○アイデアコンペの中から提案!

2011年に行った広島市中央公園アイデアコンペで提案された72作品をアイデアコンペ事務局において分析したものを紹介する。

・広島における平和をどう具現化しているか?

提案作品の主テーマを「祈り」、「歴史の継承・平和発信」、「憩い・安らぎ」、「町の発展・賑わい」、「その他」のコンセプトに分類して集計した結果が右のグラフである。

圧倒的に「憩い・安らぎ」の場の提案(50作品)が多かった。その内訳として緑やグラウンド等のオープンスペースでイベント等の多目的に使える広場(66%)が一番多かった。

祈りの場は平和記念公園に譲って、中央公園は未来志向の明るく、活動的な公園が好まれたと言える。憩い、安らぎ、楽しむことが平和の証であり、被爆者への鎮魂の気持ちを秘めて、日常の平和を甘受する場にしたいということであろう。

「歴史の継承・平和発信」の場の提案は11作品。広島^の過去・現在・未来をリンクさせて未来に引き継いでいこうと訴えている。歴史的価値のあるものの保存活用、歴史・平和の情報を集積できる場、原爆ドームや広島城や町並みを展望できる丘、世界平和を実現するための国際機関の誘致等、貴重な提案が多かった。

「町の発展・賑わい」の場の提案は4作品。メッセ機能・観光資源・文化施設・スタジアム・シンボルタワー等、集客力のある施設を集中的に配置する提案である。

・このエリアをどう捉えるか?

- ① 隣接する平和記念公園との関係をどうするかがキーポイントとなるが、機能的な役割を分担しながらも空間的な一体感を求める提案が多い。その手法として平和記念公園から原爆ドームを貫く丹下軸線を明確に意識した提案が25作品。その他に両者を分断している電車通りを立体交差(アンダーパスを含む)でつなぐ案や川沿いのリバーウォークを軸にして一体化を図る案もあった。
- ② 旧市民球場跡地は球場の取り壊しが決まった時期だったので、一部保存活用をしたり、球場の面影を何らかの形で残す提案が多かった。また、平和記念公園と中央公園をつなぐ要の地であり、繁華街からのゲートを意識した提案も多かった。
- ③ 太田川(本川)に接しているの、船着場や水辺デッキ等のリバーフロントの提案が多く、川・池・水との触れ合いを意識した提案が16作品あり。
- ④ その他、エリア内の公共施設の扱い、周辺の基町団地や広島城との関係、道路で分断された公園内の一体化策等、貴重な提案があった。

(編集委員 瀧口信二)

○お知らせ:「時代を語り建築を語る会(第7回)」開催

- ・語り人:見延典子氏(作家、小説「頼山陽」の著者)
- ・テーマ:明治の広島~広島はいかに変容したか~
- ・開催日時:2014年11月28日(金)18:30~20:30
- ・会場:広島市まちづくり市民交流プラザ、研修室A(北棟5階)
- ・会費:1000円(資料費・会場費)、学生・院生は無料
- ・参加希望者の連絡先:広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX:082-223-7226、メールアドレス:nisimar5@hotmail.com
- ・主催:時代を語り建築を語る会実行委員会(代表 石丸紀興)



〇こまちなみシリーズ④

金沢市は「こまちなみ保存条例」を制定し、「まちの歴史を色濃く残した、ちょっとした良い町並み」を「こまちなみ」として守り、育て、その雰囲気を生かした風格あるまちづくりを進めている。そこで、これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介する。

海田まち歴史の散歩道（JR・海田市駅の周辺）

J R山陽線海田市駅の北側を西国街道が通っている。広島城開城により、城を挟んで廿日市と海田市は物資の中継地となる。またこの地は広島城から京・江戸への第1番目の宿駅として本陣である御茶屋や脇本陣等が置かれ、江戸時代を通じて広島藩の蔵入り地でもあった。

街道沿いには参勤交代の大名が宿泊する御茶屋跡や家老等が泊まる脇本陣跡があり、江戸時代に幕府公用の荷物の輸送役を務めた千葉家は昔の姿のまま健在である。

古い街並みが連続的には残っていないが、格子や虫籠窓を備えた古い様式の町家や所縁のある神社仏閣等が点在し、宿場町の往時を偲ぶことができる。

また街道の中心部には海田町役場や公民館、保健センター、郵便局等の役所が集まり、安芸郡の政治・経済の中核的な位置を占めている。

・広島県重要文化財「千葉家書院」

千葉家は江戸時代を通じて天下送り役・宿送り役・町年寄などを務める。屋敷は江戸時代中期の建築様式を今に伝え、玄関は入母屋造り、座敷は数寄屋風書院造りである。庭園も広島県名勝に指定されている。

・三宅家住宅

約200年前の建築で江戸時代の面影がよく残されており、当時の宿場の中でも町家を代表する屋敷である。

これら由緒ある屋敷が残ったのは昔ながらの役場等が近くにあり、今でも人の賑わいがあるからであろう。

現在、海田町役場の移転問題が話題になっている。J Rの立体事業計画が暗礁に乗り上げているため、役場移転もとん挫しているが、①現在地近く②海田市駅南口③海田町エリア中央部の3か所が候補に挙がっている。

広島市との合併問題も潜在的に残されているので難題であるが、②か③が選択されれば、他の地区同様に西国街道は急速に寂れることになろう。観光地として活かすには可部地区のように古民家を改装した茶店（交流サロン）を設けて、例えば団子や羊羹や饅頭等、新しいスイーツを海田名物として売り出してはどうか。

平成23年にスタートした「西国街道・海田市ガイドの会」は歴史的資源を後世に残し伝え、それらを活用したまちづくりを目指している。毎月第4土曜日に定期ガイドを開催し、5人以上の団体の申し込みがあれば、希望日に随時ガイドを行っている。その他にJ Rふれあいウォーキングや歴史講演会、西国街道の清掃活動など。息の長い地道な活動に期待したい。

*西国街道・海田市ガイドの問い合わせ：海田市町企画課 kikaku@town.kaita.lg.jp

（編集委員 瀧口信二）



赤の道が西国街道（旧山陽道）



県重要文化財「千葉家書院」



三宅家住宅

筆者撮影

○読者からの投稿その1

哲学的都市構想について

MDS技術研究所 田中 聡

大乘とは悟りを開いた賢者が下界に降りて民に分かり易く説法し尊厳を集め民の日々の生活をも変えて世代を超えて継承される様で、小乗とは雲上で安閑と留まる様と解釈できます。

哲学とは世代を超えて継承すべき崇高な考え方と解釈できて大乘に似ています。両者共、説法や説明が分かりにくいと世代間継承ができず『途切れ説法』になってしまいます。

また、集団で旅行をするとき、雨を考える幹事と考えられない幹事が居ます。10年に一度の割合で旅行では雨が降りますが、雨の時に幹事さんの真価が良く分かります。

行政や土木建築家の都市構想は、晴れ構想が多いようですが、哲学者には、雨を考えてもらいたいものです。

都市構想における雨とは、大地震、大津波、大火災、大水害、疫病、放射能災害、工場災害、テロ、重大犯罪等を想定できます。

雨を考慮した哲学的都市構想を実現すれば、災害時に真価を発揮できて、高く評価され感謝されます。またこの構想では、日頃の市民生活にも波及する大乘的な変化も期待できます。

事例として『子ども達を大切に』と考える場合では、災害時に救済された子ども達を、安全に楽しく、遊ばせ・学ばせ・育てられる環境整備が求められます。

ここで例えば、『災害時に日本一、子ども達を守り切る都市を、100年掛けて造ろう』等と壮大な都市構想を樹立すれば、『厚い知恵、大胆な表現』になるかと思えます。

この構想は、実現可能だと思います。都市づくりとしての波及効果も大きいと思います。これは『心の都市づくり』になりますが、行政予算削減にもつながります。例えば、

- ① 日ごろから子ども達を守り育てる街づくり。
- ② 人にやさしい街づくり。
- ③ 犯罪が少ない街づくり。(消防、警察予算増加の防止)
- ④ 障害者や高齢者にやさしい街づくり。(介助ハードの遅れへの苦情の減少)
- ⑤ 助け合いが当たり前の街づくり。
- ⑥ 避難誘導が日頃から考えられ、訓練されている街づくり。(災害救済費の削減)
- ⑦ 等々。

このような『心の都市づくり』へも波及効果が認められるような大乘的な都市構想が、哲学的都市構想ではなかろうか?と思います。

○読者からの投稿その2

広島県立・広島市立図書館のコピー機能の充実を願う

広島諸事・地域再生研究所 石丸紀興

誰も気づいていないのか、気づいていても言わないのか、私自身は図書館でコピーしようとするとき、著しく不便、不都合を感じることもある。

有栖川公園にある東京都立中央図書館に行けば、数十台(恐らく30~40台)のコピー機が置いてあり、コピーを申請すれば、自分自身でコピーしていい場合と、図書館側がコピーしてくれる場合に分けられる。恐らく貴重本とか、破損の可能性のある場合は、図書館職員がやるのであろう(これは推測であるが)。いずれにしても、大勢のコピー申し込み者があり、一斉にコピー作業が行われている。もちろん単価は異なるが、カラーコピーも可能である。一時にコピー申込者が殺到すれば待たされることもあろうが、電子掲示板でコピー作業開始の指示や終了受け渡しなど番号が示され次々と処理される。

広島県立図書館にはコピー機が1台しかなく、もし誰かコピー量の多い作業をしている場合、相当長時間待たされる。1枚だけ割り込みを頼むことはできるであろうが、コピー枚数の計算が面倒になると、いやがられること必定である。現にコピー順番を待っている人は見

受けられし、長時間待機も珍しくない。

広島市立中央図書館の場合も、メインの参考閲覧室に一台だけである。もう1台、自由閲覧室A室の隣のB室にあり、メインのコピー機が使われているとき、そこに案内される場合もある。いずれでも、コピーを待たされている場合はよくみられる。

このようなことで県民、市民に不便・不都合を押し付けるのでなく、コピー機が何台必要なのか、コピー機を設置するスペースをどうするのかなど、広島県や広島市の来年度予算の編成において検討を進めていただきたい。

□編集後記

「社会に対する愛ーこれを都市計画という」 都市計画家石川栄耀氏が、著書「私達の都市計画の話」(1948年)の中でこう言っている。まちづくりひろしまも第14号の発刊となった。読者500名弱、緩やかではあるが着実に増えていることは、うれしい限りである。世の中、〇〇ミクスなどと騒がれているが、手元をみると厳しいことばかりだ。こんな時だからこそ、先を読み、想像して、具体的に何が出来、何から始めるのかを考えることを止めるわけにはいかない。

(編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください!**

(投稿は500字程度以内でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次	元中国放送役員